

---

# 暗黒魚類

雨宮雨彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暗黒魚類

### 【Nコード】

N7433H

### 【作者名】

雨宮雨彦

### 【あらすじ】

人を襲い、肉を食べる魚と正子是对決しなくてはならなくなりました。なぜならこの魚は、かつて正子の先祖が飼っていたものだからです。

正子は中学１年生でしたが、おばあさんについては、小さいころからいろいろと思い出がありました。

正子の家は町でも一番の金持ちで、彼女自身はあまり意識したことはありませんでしたが、この小さな町だけでなく近隣のいくつかの町を見渡しても、これほどの金持ちはいないだろうと思えるほどだったのです。経営しているのはお父さんですが、いくつか支店のあるスーパーマーケット、アパートの賃貸、林業や農園、はてはバスやタクシー会社まで手広くやっていたのです。だからお金持ちであつても何の不思議もないのですが、こんな田舎町にだつて時代の波は押し寄せてきます。だから以前はやっていたけれど儲からなくなつて、もうやめてしまった事業もあるのでした。氷室というのもその一つだったのです。

今と違つて昔は電気冷蔵庫が一般の家庭には普及しておらず、暑い夏に食べ物を保存したければ、どこから氷を買つてこなくてはならなかったのです。正子の住む町は山間にあり、冬にはとても寒くなりました。すると池などにはもちろん分厚い氷が張ることになります。厚さ１５センチを超えることだつて珍しくないほどです。それをノコギリで切り出してきて、氷室と呼ばれる建物の中に何トンと積み上げておくのです。

氷室というのはかなり大型で窓がなく、まるで倉庫のような見かけの建物です。でも壁は倉庫よりももっと分厚く、夏でも外の暑さをさえぎることができます。といっても氷が解けるのを完全に防ぐことはできませんが、冬に集めたものが夏までにすべて解けてしまわなければよいのです。半分しか残っていなくても、それでも何十

トンという量です。売れば十分商売になるではありませんか。

でも時代は変わり、今ではどこの家にだって冷蔵庫があります。お金を出してわざわざ氷を買おうとする人などいません。だから氷室はもう何十年も使われておらず、正子の家の裏山の奥深く、日の当たりにくい場所にずっと放置されていました。でもなぜか小さいころから、正子はこの氷室に心ひかれるのを感じないではいられませんでした。

おばあさんの部屋には仏壇があり、ご先祖がまつられていましたが、その部屋の壁の少し高いところで、まだ小さいころの正子には顔を真上に向けないと見るできないような場所でしたが、額がひとつかけてありました。四角い形をしてガラスがはめてあり、写真が飾ってあったのです。サイズは電話帳ほどもあるから、かなり大きな写真といってよいでしょう。白黒の古めかしいものでしたが、黒っぽい制服を着た若い男が写っているではありませんか。

「おばあちゃん、これは誰の写真？」ある日、正子は質問してみました。

「それはおまえの伯父さんだよ」とおばあさんは答えてくれました。

「こんなに若いのに？」写真の中の人物は本当に二十歳前ほどにしか見えなかったのです。『伯父』とは自分の父親と同年輩以上の人々をさすと思っていたから、正子にはひどく不思議に思えました。

「和夫は19歳で死んでしまったからね」

「どうして？」

背伸びをして額を降ろし、手に持たせておばあさんはもつとよく見せてくれました。とてもハンサムな伯父であることに正子が気がついたのは、このときのことでした。彼について、おばあさんはもう少し詳しく話してくれました。和夫はちょうど昭和元年の生まれで、昭和二十年の時点で、あと少しで二十歳に手が届くというところでした。陸軍に入隊し、戦闘機に乗っていたのです。

終戦までもう少しというところですから、そのころにはアメリカ軍はもう戦闘機を日本の本土上空へ飛ばすことだってできるようになっていました。日本の近海まで空母がやってきて、そこから発進してくるのです。そして戦艦でも飛行場でも軍需工場でも、見つけたものは手当たりしだいに破壊してゆきました。でも日本軍だって、それを黙って見ていたわけではありません。戦闘機を飛び立たせ、迎え撃とうとしたのです。その中の一機に和夫は乗っていたのです。空中でアメリカ軍機と一騎打ちとなり、だけど被弾して墜落し、戦死してしまっただけでした。

戦死といっても、それを通知する書類が一枚、軍から送られてきただけで、遺骨が戻ってきたわけではありませんでした。墜落場所が不明だったので、遺骨の収容はあきらめるしかなかったのです。

この話は、正子の心に強い印象を残しました。でもそれ以上に深く刻まれたある思いがありました。どうやら正子は、和夫に恋をしてしまったようだったのです。彼女が生まれる何年も前に死んで、写真でしか見たことがなく、しかも自分の伯父にあたる人です。だけど乙女の心には、それは大した障害ではなかったのかもしれない。

本当にかわいがっていたらしく、写真の入った額を正子が自分の部屋へ持ってゆき、机の上に飾ることはおばあさんも許してくれま

せんでした。でも写真屋を呼び、写真を複製するように手配してくれたのです。だから数日して正子の勉強机の上にも、小さなサイズのものですが和夫の写真が飾られるようになったのです。

家族の人たちはそれを笑って見ていました。中学生の女の子の気まぐれだと思ったのでしよう。でも正子は本気だったのかもしれない。このことがあってから、正子とおばあさんの間のきずなはさらに深まったようでした。二人がともに大切に感じている和夫を中心にしてのきずなでしょう。でもそんなある日、おばあさんがなくなってしまったのです。

それなりの年齢ではあったので、誰も驚きませんでした。正子も覚悟をしていたのかもしれませんが。でも本当の驚きは、お葬式がすんだ後にやってきました。始めてみる顔の中年の男がやってきて、「お嬢さん、お話ししたいことがあります」と正子に言ったのです。男は弁護士で、おばあさんの遺産相続の件を担当しており、もちろんすぐに応接室へ通されました。その場には両親も同席していましたが、そこで初めて正子はおばあさんの遺言の内容を聞かされたのです。

遺産の大部分は、当然ながらお父さんが受け取ることになっていました。それはごく普通のことでしょう。でもそこに変わった条項が付け加えられていたのです。なんと廃墟になったあの氷室だけはお父さんではなく、直接正子に譲られるというのです。

何の役にも立たない施設ですから、氷室の資産価値はそれほどはありません。ただ山の中で立ち枯れているだけのものです。あんなものをなぜわざわざ孫娘に残したかったのか、おばあさんの考えは誰にも理解できませんでしたが、とにかくそういうことだったのです。法的にも問題はなく、すぐに氷室は正子の名義に書き換えられました。弁護士の手から正子が氷室の鍵を受け取ったのは、いうまでもありません。

思いがけず自分のものとなった氷室を訪ねてみようと正子が思い立ったのは、その何週間かあとのことでした。夏休みの最中の暑い日で、町の中と同じように山中だって暑いに違いないけれど、『氷室』という名の涼しげな雰囲気にはひかれて出かける気になったのかもしれません。麦わら帽子をかぶり、物置から自転車を引き張り出

したのです。

きつい坂道を登って、それでも15分ほどで着くことができました。町の中よりも標高が高く、山影でもあるけれど、暑いことに変わりはありませんでした。日差しの強さに、あちこちでかげろうが立ち昇るのが目に入るほどです。自転車を止め、正子は氷室の高い屋根を見上げるようになりました。ひさは深く長く、彼女の上におおいかぶさるようです。トラックを横付けして氷の出し入れをしたのでしよう。正面には幅の広い大きな扉があり、しっかりと鍵がかかっていますが、そのキーがいま正子の手の中にあるのです。

さび付いているかもしれないと思っていましたが、キーを差し込むと鍵は意外にもパチンと開いてくれました。あまりにもあっけなく、少し奇妙な感じがしなかったわけではありません。でも両手をそえ、全身の力を使って、正子は扉を開き始めたのです。

氷室の扉は二重構造になっていました。だからもう一枚が正子を迎えてくれたわけですが、もちろんこのキーもポケットの中に入っていました。風雨を受けていないぶん、この扉はもっと簡単に開くことができました。

もう何十年も使われていないのだから氷室の内部は空っぽで、何もありませんでした。正子だって、何かがあることを期待していたわけではありません。窓すらない建物だから、入口から差し込む光以外は真っ暗であるに違いないと思っていたのです。でも正子の予想は大きく裏切られることになりました。真っ暗どころか、氷室の内部は明るかったのです。

その光がどこからやって来ているのかはすぐにわかりました。屋根が破れ、大きな穴が開き、そこから外の日差しが降り注いでいた



のです。

はじめ正子は、自分が何を見ているのかなかなか理解することができませんでした。あたりが暗いからではなく、光は十分にあるのですが、あまりにも意外なものだったからです。一機の飛行機でした。

墜落して屋根を突き破っているのですが、氷室全体を破壊するに  
はいたっていませんでした。だから大きな飛行機だったのではあり  
ません。せいぜい一人乗りで、色は濃い緑に塗られ、翼と胴体には  
丸い円のマークが赤く描かれているのです。日の丸に違いありませ  
ん。

こんなに小型の飛行機で敵と戦ったのかと、正子も少しばかり感  
慨を感じないではいられませんでした。もちろんジェット機ではな  
く、機首にはプロペラがついているのです。墜落のショックで風防  
ガラスはすべてなくなっていますが、幸運にも炎上することはなか  
ったようです。けどものすごいスピードで衝突したのは間違いあ  
りません。屋根だけでなく、氷室の床にも大きな穴が開き、この戦  
闘機はその中に半分ほどめり込んでいたのでした。

おばあさんがなぜ自分にこの氷室を譲ってくれたのか、それまで  
正子も不思議に思っていたわけではありません。何人かいる  
孫たちの中でも、特に正子がおばあさんとは親しかったというのは  
事実でしょう。だけどその親しさと氷室とは、正子の頭の中でも結  
びつくことはありませんでした。それ以外に言えそうなことといえ  
ば、おばあさんも正子も伯父の和夫に対して特別な親愛の情を感じ  
ていたということでしょうか。

このことに思い至ったとき、正子はまた違った目で戦闘機を眺め  
る気持ちになりました。ある考えが思い浮かんだのです。どうした  
らそれを確かめることができるだろうと、正子は考え始めました。  
「家の表札のように、戦闘機の機体にもパイロットの名前が書いて  
あったりはしないものだろうか」と正子は思いました。そして探し

始めたのです。

穴の上に宙ぶらりんにつっかかっているだけなので機体はひどく不安定で、よじ登ることなどももちろん不可能でした。そんなことをしたら、正子もたらす重みや揺れで、いつ下へ落ちてしまうかわかったものではありません。少し奇妙なことでしたが、地中に開いた大きな穴の上にこの氷室は建てられていたのです。そんな穴の存在など、きっと誰も知らなかったでしょう。ここの地面の下には数メートルの厚さを残して、ずっと昔から空洞のようなものがあつただけで、それを知らずに氷室を建ててしまったようです。でも地面の上からは何も見えないのですから、無理ありません。

だけどある日、その上に飛行機が落ちてきたのです。屋根を突き破り、床に激突し、地下の空洞にまで届く大穴を開けてしまったのです。

しばらく探し回って、とうとう正子は伯父さんの名を機体に見つけることができました。翼の付け根のわかりにくい場所ですが、ペンキで小さく『羽田和夫』と書かれていたのです。それが担当パイロットの名だったのでしょう。これが伯父さんの乗機であつたということは、伯父さんは戦死場所が不明だというのではなく、敵弾を受けてこの場所、つまり自分の家が所有する氷室の真上に墜落してしまつたということになります。伯父さんが所属していた航空隊はここから程遠からぬ町にあつたということでしたが、それにしてもなんという偶然なのでしょう。

この残骸を目にして、正子は何を感じたのでしょうか。恐ろしさ？ 悲惨さ？ いいえ、奇妙に聞こえるかもしれませんが、ほっとする安堵だったのです。胸をなでおろす感じといえはいいかもしれません。伯父さんはどことも知れない山中で死んだわけではなかった

のです。もちろん軍には内緒でしようが遺体は回収され、火葬され、もうずっと以前から羽田家の墓所におさまっているのに違いありません。

墜落場所が自分の家が所有する氷室であつたことをなぜおばあさんは軍に届け出なかつたのか、その理由は想像してみるしかありませんでした。よく見ると残骸には敵機から受けた弾の跡がいくつもあり、それが墜落の原因になったことは間違いありません。家恋しさに戦闘機を奪って脱走し、ふるさとへ向かつて飛行中だったというのではないでしょう。墜落したのがここであつたというのは、本当に万に一つの偶然でしかなかったのです。

でもあの時代の出来事です。「羽田和夫は弱虫だ」と世間から思われてしまう可能性があつたかもしれません。それは真実ではないし、それ以上に、そんなふうに思われてしまうことが羽田家の人々にとつては耐え難かつたでしょう。だから墜落のことは誰にも話さず、これまでずっと秘密を守り通してきたのです。正子はそう納得することができました。その後も5分か10分の間、正子は立つたまま戦闘機を眺めていました。何年ものあいだ風雨にさらされ、あちこち色がかすれ始めています。ペンキがはげたその下に、アルミのフライパンのような白い金属の地肌が顔を出しかけているのです。

それでもとうとうため息をつき、正子は歩き始めることにしました。いつまでもここにこうしていることはできないからです。けどそうやって足を動かしかけた瞬間、どきりとして、正子は心臓が口から飛び出してしまいそうな気分を味わうことになりました。氷室の中に突然誰かの声が響いたのです。男の声で、なんと戦闘機の下に開いている穴の中から聞こえてくるではありませんか。

「そこにハシゴがあるだろう？ 足を滑らせないように気をつけて、正子も降りておいで」

声は親しげにそんなことを言ったのですが、正子は奇妙な思いを感じ始めていました。どこかで聞き覚えのある声だったからです。

「正子、こっちだよ」同じ声が再び聞こえました。声の主の正体については、もう正子も気がついていました。お父さんの声だったのです。

「お父さんなの？」

「そうだよ、正子」

首を伸ばして見下ろすと、穴の底にいる人物と目を合わせる事ができました。たしかに正子のお父さんで、こちらを見上げて、にっこりと笑っているのです。

もちろん正子は言われた通りにしました。穴の底で合流するとすぐにお父さんは歩き始めたので、彼女も着いていったことはいうまでもありません。このときまで気がつかなかったのですが、これはただの穴や空洞ではなく、なんと洞窟だったのです。氷室の破れた屋根から太陽の光が差し込んでいますが、それで照らされているのは一ヶ所だけで、その前後に真っ暗なトンネルが続いているのが見えるのです。自動車が通れるほど大きくはありませんが、正子が窮屈さや息苦しさを感じるほど狭くはありません。懐中電灯を手に、お父さんは壁を照らしてくれました。

白っぽい岩できていて、ぬれたようにつやつや光っています。鍾乳洞の一種らしく、ツララのような形の石が天井からいくつもぶら下がっています。「お父さんはどこからこのトンネルに入ってきたの？」正子は口を開きました。

「お父さんは家からきたのさ。このトンネルは山の真下をずっと通って、家の地下までつながっているのだよ」振り返り、お父さんは懐中電灯で背後を照らしてくれましたが、もちろん届くはずはなく、光は暗いトンネルの中に消えてしまっています。

「家のどこから？」

前を向き、お父さんは再び歩き始めました。「もちろんカラ井戸の底さ」

「ああ、あそこ」正子はうなずきました。正子の家は庭が広く、木もたくさん植えられ、それだけでなく今では使われていない建物な

どもあつたのです。井戸跡もその一つで、水はとつくになくつていたのですがまだ形は残っており、「危ないから絶対に近寄ってはいけない」と言われながら正子は育ってきたのでした。

「カラ井戸のフタは、鍵を開けると取り外すことができるようになっていてね。そうするとハシゴが顔を出すのだよ」お父さんは言いました。

「それを降りるとこのトンネルに出るのね」

「その通りだよ」

「でも、どうしてこんなトンネルがあるの？」

「それを今から正子にも教えてあげるよ」

懐中電灯の光しかない真つ暗な中を、正子とお父さんは歩き続けました。やがて水音が聞こえてくるようになったのは2、3分たったころのことでした。トンネルは何度かグネグネと曲がり、戦闘機の開けた穴から漏れてくる光など、振り返ってもとつくに見えなくなっていました。

水音といっても、ポタンポタンとたれる音ではありません。かといって流れる川のようなでもなく、ピチャピチャさわさわという音なのです。耳にして、沼か池の水面を正子は連想しました。懐中電灯の光の中に水面が見えてきたのはそのときのことでした。

石の床が終わり、水がきらきらと光を反射するのが目に入ったのです。トンネルは少し広くなり、もうここではかなりの横幅があります。水面はその中央に丸く広がり、信じられないほど透明な水な

のですが、岸を離れるとまるで切り立った崖のように水底はずんずん深くなり、見通そうとしても底などとも見ることはできません。ただ暗いばかりで、何にも反射することなく懐中電灯の光は水に吸収されてしまうのです。ぞっとするような眺めで、正子は思わず身震いをしないではいられませんでした。岸辺に立ち、最初に浮かんできた疑問を正子は口にしました。「この水はどのくらい深いの？ トンネルはここで行き止まりなの？」

「深さはわからない。ほとんど底なしといってもいいだろうね。洞窟はこの先もずっと続いているのだが、この地底湖があるせいでこれ以上先へ進むことはできないのだよ。だから深さだけでなく、トンネルがどこまで続いているのかも見当がつかないんだ」

お父さんが懐中電灯を向けてくれたので、正子は水面の終わりを見ることができました。そこには垂直な岩壁があるのですが、お父さんの言うとおり水で満たされ、岸辺も床も見ることとはできません。潜水服か潜水艦でもない限り、トンネルの先へ進むことは不可能なようでした。「ここへ何をしに来たの？」正子はお父さんを振り返りました。

「正子、よくごらん」

お父さんが突然かがんだので、正子は少し驚きを感じました。でも大したことではなく、お父さんはただ懐中電灯を水面に近づけただけだったのです。そうやって今まで見えていなかった部分を照らしてくれたのです。

水の中が明るく照らし出され、クリスタルガラスのような水の美しさに、正子はもう一度息をのみました。でも彼女を本当に驚かせたのは、そのことではありませんでした。光はあるものを突然照ら



し出し始めていたのです。

こんなに奇妙な物を、正子はそれまで一度も見たことがありませんでした。魚の一種であることは間違いないでしょう。泳ぐことに適した流線型の体をしているし、尾びれや胸びれ、背びれだってあります。

「正子、私たちの家がどうして今のような金持ちになったか、知っているかい？」お父さんが突然言いました。

「知らないわ」

「何百年も昔のことだが、羽田家は、殿様や町の人たちにとっても味のよいアユを提供することができた。アユを売る商売をしていたのだよ。そのおかげさ」

「アユって、魚のこと？」

「そうさ。家の少し南に川があるだろう？ あそこで取ったアユだということにしてあったが、本当は違うんだ。羽田家のアユは川で取ったものではなく、実は養殖魚だったのだよ」

「アユって養殖することができるの？」

「現在では可能だが、江戸時代には不可能だった。だからこそ大もうけができたのだよ。ごらん、ここの水はガラスのように透き通っている。夏でも涼しく、真冬でも水は適度に温かい」

「エサはどうしたの？」

「もちろん家から運んできたさ。このトンネルを通れば誰に見つけることも、怪しまれることもなかった」

「本当にそんなことをしていたの？」

「そうさ。そうやって羽田家は大きくなっていった。だがそれもいつまでも続くわけではなく、明治のはじめごろからは商売を変えることになった。それ以来この地底湖は見捨てられていたのだが、理由は正子にもわかるだろう？」

「そうね」正子もうなずくしかありませんでした。そしてもう一度懐中電灯の光を追いかけて、魚たちの姿に目をこらすことになったのです。

これが元はアユであつたとは、正子にはとても信じる事ができませんでした。第一に体の大きさがまったく違うのです。小さなもので1メートル以上、大きなものと彼女の身長の2倍ほどもあるのです。胴体は丸っこく、でもあちこちが出っ張って、戦車のようにゴツゴツしています。頭などはまるで西洋の騎士が身につけるカブトのようではありませんか。わずかにアユらしいなごりといえ、優雅な形で二つに分かれた尾びれぐらいですが、これにしたって他のヒレと同じように鋭いトゲを生やし、なんだか凶暴な印象です。

そして最大の特徴は、この魚には目がないことでした。本当にすっかり消えてしまい、ヨロイのような頭にはかすかな跡すらないのです。そういう形の魚が何匹か水底に沈み、ゆっくりとエラを動かしているのです。口をぽかんと開けている正子の表情に気がついたでしょう。お父さんが言いました。「洞窟の中は真っ暗だから目など必要ないのだろうね」

「でもそれ以外の体の変化はどういうことなの？ ただのアユが、たつた何百年かで、これほどの変化をしてしまうものなの？」

お父さんは少しため息をつきました。「それはお父さんたちにも少し不思議なんだ。だがある人の推測では、人類の知らないある種の魚がこの地底湖には何万年も前から住み着いていて、しかし私たちの祖先は、もちろん何も知らずにアユを放して飼いはじめた。いいかい？ この洞窟がこの先いつたい何キ口続き、どこまでつながっているのか、どのくらいの量の水をたくわえているのか、誰も知らないのだよ。そこにはどんな奇妙な魚や生物がひそんでいるか、

わかったもんじゃない。その未知の魚とアユとが出会い、交配し、雑種ができていったのだと思う。二種類の魚の性質が混じった新種が出来上がったのさ」

「それがあのおかしな魚なのね」正子是指さしました。でも魚たちは、正子やお父さんには何の関心もないようです。相変わらずじつとして、口とエラを動かしているだけです。「目がないから懐中電灯の光にも反応しないのね」

「そうさ。昔は近寄ってくる人の足音を聞きつけて、何十匹も集まってきたものだそうだが。人が来るとエサがもらえるとわかっていたからね。でもエサなどもう100年以上やっていない」

「それでも生き続けているんだわ」

「どこかで何かのエサを取って、それを食べているのだろうね。それが何なのかまったくわからないし、あの魚が何匹ぐらいいるのかすら見当がつかないのだがね」

「だけどこれ以上、お父さんにも言うことはないようでした。正子と一緒にそのまま回れ右をして、家へと帰ってきたのです。戦闘機の発見にしろあの魚のことにしろ、印象深い経験ではあったけれど、正子にとってそれほど大きな出来事ではなかったのかもしれない。ときどき思い出すことはあっても、数日の間は何事もなく過ぎていったのです。でもそれも、あのニュースを耳にするまでのことではありませんでした。」

お父さんが経営している会社の事務所は家の中にあつたので、そこで働く人たちと顔を合わせるのは、正子にとつてはいつものことでした。新三郎という人がその中にいて、短く刈った髪が白くなりかけた中年の男でしたが、ある朝、顔を見るなり正子に話しかけてきたのです。「お嬢さん、あの話をお聞きになりましたか？」

「なんなの？」事務室のすみの空いた机について夏休みの宿題を片付けようとしているところでしたが、正子は顔を上げました。この時代、クーラーのある家庭はまだ珍しく、正子の家でもこの部屋にしかなかったのです。

「昨日の夜、ダム湖で花火大会があつたでしょう？ あそこで奇妙なことが起こつたんです」

「事故でもあつたの？」正子が住む町から見れば隣町になりますが、ある谷を横切る形で新しい大きなダムが作られていたのです。谷の中央を流れる川をせき止めて水をため、ダム湖と呼ばれる湖ができました。その完成を祝って昨夜、花火大会が行われたのです。人が何千と集まる大きなイベントだったのですが、面倒くさがって正子の家からは誰も見に行きませんでした。でも新三郎は出かけたのです。

「へえ」新三郎は話しはじめました。「昨夜は大層なひとで、一万人は下らなかつたかもしれせん。打ち上げられた花火は大小合わせて2500発。そりゃあ見事なものでしたよ。お嬢さんもお出かけになればよかったのに」

「それで何が起こつたの？」

「ほとんどの見物人はダムのでっぺんやら、まわりの土手によじ登って見物しておりました。かくいうワシもその一人でしたがね。だけど気のきいた連中は、そんな場所で人ごみにもまれるようなことはしません。ダム湖にボートを浮かべて、それに乗って見物としゃれこみました。頭のいいやり方だと思いますね。でも問題は、花火の打ち上げが全部すんだ後のことでした」

「何が起こつたの？」

「何も起こらないんですよ。ボートが岸にこぎ寄せてこないんです。浮かんでいる姿が見えるどころか、近寄ってくる気配すらない。土手の上の見物人たちはもうみんな帰りじたくを始めているというのにです。不審に思った者たちが、懐中電灯を使って湖面を探し始めました。光をいくつも集めて、広い湖面を照らして回ったんです。するとボートはすぐに見つかりました。湖の中央あたりをポツンとただよっていました。奇妙なのは、その上には誰も乗っていないように見えることでした。『おい』と岸にいた連中が呼びかけてみたのはいうまでもありません」

「それでどうなったの？」

「どうもなりませんでした。返事もないし、ボートの上にはやはり人影一つないのです。無人のままただよっているんです」

「乗っていた人たちは？」

「こりゃおかしいというのでもう一つボートが用意され、岸からこいでゆくことになりました。たまたまそばにいたので、ワシもそれ

に乗り込んだのです。他の何人かと一緒にオールを使い、湖の中央へと急いだわけです。けど行ってみても、やはりボートの中は空っぽでした。横付けしてワシたちは乗り移ったのですが、本当に一人もいないんですよ。12、3人は乗っていたはずなんですがね。食べかけの弁当やジュース、ビールの空きビンなどが転がっていました。花火の打ち上げが始まったときまで人が乗っていたことは間違いないです。目撃者はたくさんいますから。でも花火が終わってみると、もう一人の姿も見えなかったというミステリーですから」

「その人たちは今も見つかっていないの？」

「そうです。警察が呼ばれて調査がされましたが、何もわかりませんでした。水に落ちたにしても十人以上が一度になんて変だし、弁当やその他のものはそのまま残っているわけだから、ボートが転覆したということも考えられません。もしそうなら、弁当類も一緒に水に落ちるでしょうから」

「そうね」正子はうなずきました。

「結局何もわからないまま、警察も引き上げるほかなかったんですが、ボートの上で奇妙なものが発見されたんですよ」

「何なの？」

「ほら」ポケットに手を入れ、新三郎は取り出して見せてくれました。「何枚も落ちていたから、一枚ぐらいかまわないだろうともらってきたんですがね。残りはもちろん、警察が全部集めて帰りましたよ」

それは一体何だったと思います？ 手のひらの上に乗せられ、正

子は目を丸くすることになりました。銀色をした魚のウロコだったのです。でもその大きさが問題でした。とてもじゃないけど普通の魚のものとは思えません。直径は10センチを越え、正子の手のひらからだって、はみ出してしまうのです。だけど形といい色といい、セルロイドの下敷きのような手触りといい、やはり何かの魚のウロコとしか考えられません。

「大きなウロコね」そういいながら正子は新三郎の手に返しましたが、それと地底湖で見たあの魚のことが頭の中で結びつくことはまだありませんでした。結びつくには、事件がもう一つ起こるのを待たなくてはならなかったのです。



この年の夏は前線が長くいすわり、雨の日が多く続きました。花火大会の夜にボートに乗っていた人々のうち、誰ひとり発見されることはなかったのですが、時間がたつと事件そのものもゆつくりと忘れ去られていくようでした。でも警察は何もしないわけにはいきません。ボートをいくつも出し、大きな網を使って行方不明者の捜索を続けていたのですが成果はなく、とうとうダム湖の水をすべてぬいてしまうことになったのです。これは農業用と発電をかねたダムであり、本当は水をぬくなどんでもないことなのですが、こういう事情だから仕方ありません。放水ゲートが大きく開かれ、まるで巨大な霧吹き器のようにして、ダムは水を下流へと噴き出しはじめたのです。

1分間あたり何十トンという量だったことでしょう。ダム湖の水位はゆつくりと下がってゆきました。新三郎に誘われて、正子もその様子を見物していました。本当はある町へ荷物を届ける用事があり、新三郎が小型トラックを運転して行くことになったのです。そのときに「お嬢さんも一緒に行きませんか」と誘われ、家の中のあるまりの暑さと風通しの悪さにうんざりしていたこともあって、正子は首を縦に振ったのでした。

トラックが走ると、開いた窓からは涼しい風が吹き込んできます。髪をなびかせて正子はいいい気持ちでしたが、帰り道にたまたま近くを通ったので、物見高い新三郎が「ちよつとダムに寄ってみましよう」と言い出したのです。

コンクリートの壁から吹き出す水は、たしかに涼しげな眺めではありません。新三郎はダムのでっぺんにトラックを止めたのですが、

風に乗って吹き上げてくる水滴がポツポツと頬に触れ、くすぐったいような気持ちになります。太陽の光を受けて虹ができ、あまりにもあざやかなので思わずため息が出そうです。何分かって何気なく振り返り、ダム湖の水がもうずいぶん減ってしまっていることに正子は気がつきました。

本格的な搜索は、水がゼロになってから行われるのでしょう。警察官の姿はまだ一人も見ることができませんでした。目分量でしかありませんが、水がすべてなくなるにはあと一日はかかりそうな感じ です。それでもすでに湖底がかなり姿を現しかけています。水没していた山の斜面は、草や木がすべて枯れ、まるで真冬の山中のように、枝と幹しかない丸裸の木々が何十と立っています。ついには道路や村の建物までが顔を出し始め、泥とホコリで茶色に染まり、ここから見るととても小さくて、まるで子供が粘土で作ったおもちゃのようにしか見えません。

湖の水は、もう元の面積の三分の一もありません。溪流から流れ込む水ですから、にごってなどおらず、かなりの深さまで見通すことができます。そしてこのとき、水中に揺らめく無数の巨大な影に気がついて、正子がどれほど驚いたことがか。

はじめは目の錯覚かと思えたのです。でも目をこらし、本当に見えているのだと納得することができました。ソーセージのように細長いもので、たしかに黒っぽいのですが、動くにつれキラリと銀色に光を反射する瞬間があります。「あれは何かしら？」と正子思わず大きな声を出したのはいうまでもありません。

「おお」もちろん新三郎もすぐに気づきました。「こりゃあたまげた。あれではまるで、ウナギ屋の店先のようにありませんか」

言われてみれば、確かにそうではありました。ウナギ料理を出す店では、生きたウナギを業者から仕入れ、お客さんの注文に応じておなかを裂き、料理してテーブルに出すのです。その店先では、生きたウナギたちがよく大きなオケの中にまとめて入れられているのですが、まるで黒くて太いスパゲッティのようにうごめき、何十匹もがぬるぬるとからみ合っているところは、あなたも見たことがあるでしょう。水がなくなりかけているダム湖の底で起こっている光景は、確かにそれによく似ていたのです。

おかしい場面でおかしなことを思いつく新三郎に正子は思わず笑ってしまいそうになりましたが、そんな場合ではないということにすぐに思い出しました。ダム湖の底に見えているあの魚たちのサイズときたら、どういうことでしょう。花火大会の夜に起こった事件の犯人は彼らに違いありません。あの体でもって大きくジャンプし、一人ずつか、あるいは2、3人まとめてだったかもしれませんが、ボートの上にいた人々を次々に水中へ引きずり込んだのでしょうか。岸の人々はみな上を向いて花火に注目していたわけですから、目撃者がいないことも納得できます。引きずりこまれた人々がどうなったか、その後の運命を想像するのは難しいことはありません。

ダム湖に見えている怪物魚たちと、地底湖で見た地底アユのことが正子の頭の中で結びつくには一秒もかかりませんでした。大きさには数倍の違いがありますが、二つは同一の魚に違いありません。どちらも目を持たないし、カブトのような頭の形、ウロコの模様やヒレの形にまで見覚えがあります。たしかに地底アユは、あの洞窟の中にしかない魚です。百年間もあそこにひそんでいたに違いありません。でもある日、何も知らずに洞窟の上にダム湖が作られました。これだけの量の水がドスンと乗ったのです。何万トンという重さに違いなく、ならば地面のどこかに穴やひび割れの一つや二つ、できてしまっても何の不思議もないではありませんか。

このころには正子や新三郎だけでなく、ダム職員たちももちろんダム湖の異常な光景に気がついていました。あんなに巨大な魚など、この世の誰も目にしたことがなかったのです。甲高い音でサイレンが鳴らされ、職員たちがやってきて、トラックを移動させるようにと新三郎と正子に言うてきました。ここはあの魚たちにあまりにも近く、何が起るか想像もつかないからです。そういえば、魚たちがあの体や尾の先でドスンドスンとたたくからでしょう。ダムの本体がゆらゆらと振動するのだって感じる事ができました。

新三郎がエンジンをかけ、正子を乗せてトラックはすぐに動き始めたのですが、正子の胸の動悸はなかなかおさまってくれませんでした。ダムを遠く離れても正子は不安なままで、心臓は今にも口から飛び出してしまいそうなほどドキドキしており、ゆっくり鼓動することなどもう二度とないのではないか、という気までしてくるほどでした。

「たまげましたねえ、お嬢さん」と気楽そうに新三郎から話しかけられることさえ、正子には苦痛でした。「ダム湖にあんな怪物がいやがるなんて、誰も夢にも思いませんや。あれお嬢さん、どこかご気分でも悪いんですか？」

「ううん」と正子は首を横に振りましたが、それがウソだったことはいっまでもありません。

けれど正子の不安も、家が見えてくるころにはおさまってくれたようでした。汗をふいてトラックを降り、正子は家の中へと駆け込むことができたのです。でもそのとき、応接室の中の様子が偶然ド

ア越しにちらりと目に入っただけですが、深刻そうな顔をしてお父さんがイスに座り、誰かと話している姿が見えたのです。相手も男の人で、お父さんよりは年上に見えます。正子にはじめて見る顔で、口のまわりに濃いひげを生やしているのが目に付きます。この人も深刻そうな表情を浮かべていますが、足音に気づいて顔を上げ、正子に向けてお父さんが手招きをしたのはそのときのことでした。

少しびっくりしましたが立ち止まり、歩く方向を変えて正子は応接室へと入っていったのです。さっそくお父さんはその人を紹介してくれました。東京の大学で働いている有名な学者で、名前は下田先生というそうでした。

「実はね、正子。下田先生にはあの魚の件で来ていただいたのだよ」お父さんが言いました。

「花火大会の夜の事件のことさ」下田先生も口を開きます。

「新三郎さんが見つけたウロコは見ましたか？」目を丸くして、正子は言いました。

「ここにあるよ」テーブルの上に置いてあったのをつまみ上げて、下田先生が見せてくれました。「お父さんに案内されて、私もさっきあの洞窟の中を見せてもらったよ。だから心配しているのさ。あの魚がもし地上に現れたりしたら、大変なことになる。もしかしたらあの花火大会の事件も……」

「もう遅いわ」正子は思わず大きな声を出してしまいました。

「どうしてだね？」

新三郎と一緒にダム湖へ行き、そこで目撃したことを正子はすべて話しました。お父さんと下田先生の顔色がみるみる変わっていったのはいうまでもありません。

その夜、正子はラジオでニュースを聞きました。言うまでもなく、日本中がダム湖の異変のニュース一色だったのです。湖面は強力なサーチライトで照らされ、レポーターや記者たちが集まり、警察官や自衛隊員と一緒に監視を続けていました。県知事の要請を受けて、自衛隊までが出動していたのです。正子の家の前の道路だって、濃いグリーンに塗られた戦車が何台もごうごうと駆け抜けていくほどだったのです。

プラモデルでしか見たことのない本物の戦車を目にして、正子の弟は大はしゃぎをしていましたが、もちろん正子はそんな気持ちにはなりませんでした。この大事件が羽田家の責任であるような気がしていたのです。何百年も昔のこととはいえ、あの地底湖にアユを放したのは正子の先祖なのです。そのアユが変化をとげ、あのような怪物が生まれてしまったのです。正子と同じように感じているからこそ、お父さんも下田先生を東京から呼んだのでしょう。

この夜は遅くまで起きて、正子はラジオに耳を傾けていましたが、真夜中ごろ新しいニュースが入りました。なんとあの魚たちがダム湖からすべて姿を消してしまったというのです。ついさっきまでは何匹もいて、浅くなってしまったダム湖の水面をまるで煮えたぎるナベのように波立たせていたのですが、気がつくとも静かになり、波も魚たちの影ももうすっかり見えないのです。警察官や自衛隊員たちもあつけにとられていたに違いありません。サーチライトを動かし続けたのですが、何も見つけることはできませんでした。

真相が明らかになったのは日が高く昇り、ダム湖の水がさらに減ってからのことでした。もう湖底の泥の上を人が歩けるほどになっていたのですが、その泥の中央に大きな穴が開いているのが発見されたのです。それこそ汽車のトンネルほどのサイズがあり、泥の中央に、まるであくびをする巨人のように大きく口を開いていました。穴の内部にはまだ水が残っているのですが、にこっているせいで見通すことはまったくできませんでした。でも、この中をあの魚たちが通っていったのは明らかではありませんか。この穴は地底湖につながっていて、そもそも魚たちはこの穴を通ってダム湖へとやってきていたのでしょうか。

このニュースを聞き、新三郎はあきれた声で言ったものでした。「なんのことはない。やつらは地の底からやってきて、食事をして腹がいっぱいになったからまた帰っていった、というだけのことですあね」

まったくその通りなので、正子は何も言う気になりませんでした。

でも地底アユたちは、その後も地底でおとなしくしていてくれるつもりはないようでした。まだまだ被害が続いたのです。付近の河や湖だけでなく、40キロ以上離れた海岸にまで地底アユが姿を現したのには、誰もがひどく驚きました。淡水だけでなく、海水にも適応できることが証明されたわけです。さらに驚くべきは、地底アユのいる洞窟はまるで都会の地下鉄線路のようにして、あちこちの水系とつながっているということです。人間が知らないだけで、あらゆる河や湖の底にはチクワのように大きな穴がぼこぼこ口を開け、トンネルが縦横無尽につながっているのに違いありません。そうとも考えないと、地底アユたちがまるで忍者のようにあちこちに出没できる理由が説明できません。

でもここで、地底アユたちがもたらした被害について詳しくお話しするのはやめておきましょう。ただ一ついえるのは、正子にとつて少しばかり心が安らいだのは、花火大会の夜以降、一人の犠牲者も出ていないということでした。地底アユたちは養殖場を襲い、ハマチやタイを根こそぎにするようになったのです。人間よりもそういった魚たちのほうが味がよく、襲うのも容易だと考えるようになったのかもしれませんが。

驚くべきことは、川や湖からも遠い場所にあったマスの養殖池までが同じように襲われたことで、数百メートルの距離なら地底アユたちは土の上をはって歩くことができたのです。彼らが通ったあとは地面が掘り返され、まるで大型のトラクターが走ったかのような眺めでした。

正子だけでなくお父さんも相当悩み、警察に真相を話してしまおうかという気持ちになり、そのたびに下田先生からとめられるということを繰り返していました。



「あんたたち一家に責任があるとは私は思わないし」と下田先生は言ったものでした。「もし何がしかの責任があつたとしても、もう何百年も昔のことだ。とつくに時効になっているよ」

その後、下田先生は東京へ帰っていきましたが、絶えず連絡は取っていました。その間も地底アユによる被害はポツポツと出ていたのですが、その神出鬼没ぶりには警察も自衛隊も手を焼いていたのです。でもとうとう、地底アユにも最後の日がやってきたようでした。

だけど正確には警察や自衛隊が退治したのではなく、地底アユたちが勝手に死んでしまったというべきかもしれません。ある川の河口に近いあたりでしたが、ある日おなかを上に向け、プカプカと浮いている姿が発見されたのです。おそろおそろボートがこぎ寄せられました。みな完全に死んでいて、足でけるうがオールでつつこうが、ピクリともしませんでした。すぐに数がかぞえられ、20匹いることが確認されました。

これまでの事件を目撃した人々の証言から、地底アユは全部で20匹存在するのだということがわかっていました。ということは、あまりにあっけない幕切れですが、巨大な地底アユたちはこれですべて死んでしまったということになります。

もちろん新聞はこのニュースを大きく取り上げ、日本中がほっと安心することになりました。怪物たちはみな死んでしまったのです。

でも正子やお父さんたちはまだ安心できませんでした。氷室の下あの地底湖で、あの20匹とは別のもっと小さい地底アユたちを見ていたからです。20匹が死んでも、小さい地底アユたちがいずれ大きく成長して、また同じ災害を引き起こすかもしれないではあ

りませんか。

死体で見つかった20匹はもちろん引き上げられ、解剖用メスの代わりに大きな包丁を手にした学者たちの手で解剖が行われましたが、暑い季節で腐敗が進んでいたこともあって、死因はよくわかりませんでした。病気を持っていたようにも毒物を食べたようにも、何かの敵に襲われたようにも見えなかったのです。それでも怪物が死んだことは確かでしたから、死因が何であれ、それで十分ではないかというのが日本中の人々の気持ちだったようです。

下田先生が再び正子の前に顔を見せたのは、夏休みもそろそろ終わりに近づいたころでした。お父さんには知られたくない事情があるとかで、下田先生はまず新三郎に連絡し、新三郎が正子に耳打ちをしたのでした。だから約束の日の約束の時間、正子は氷室の前で一人で待っていました。午後遅くでしたがまだ日差しは強く、ひさしの下の日影に入っただけでも、正子は何度か額の汗をふくことになりました。

下田先生は時間通りに現れました。自分の車なのかレンタカーなのか、小型自動車を運転してやってきたのです。ブレーキをかけてエンジンを切り、下田先生はすぐに自動車から降りてきました。

「こんにちは、下田先生」

「やあ正子ちゃん、すまないが少し手伝ってくれないかな」下田先生はもう自動車のトランクを開けようとしています。その中から何か荷物を取り出そうとしている様子です。

荷物というのは四角い箱で、正子なら両腕で抱えるのが精一杯なほどの大きさがありました。銀色の金属でできていますが、風通しのためなのか、何ヶ所かに穴が開けてあるのが目に付きます。太い丈夫なロープが全体にかけてあり、人が背中に背負うことができます。下田先生が背中にかつぐのを、もちろん正子は手伝ってあげました。

「先生、これは一体何なの？」正子が疑問を口にしたのはいうまでもありません。

「今にわかるよ。ちょっと重たいのが難点だがね。ところで正子ちゃん、氷室の鍵は持つてきてくれただろうね」

「ええ」ポケットから取り出し、正子は見せました。

「それでいい。ではドアを開けてくれるかい？」

もちろん正子はその通りにしましたが、そうしながらも頭の中を疑問が渦巻いていました。あの大きな箱は何なのでしょう。あれを使って、氷室の中で何をしようというのでしょうか。

氷室の内部は以前と変わったところはなく、戦闘機は同じように不安定に危なっかしく、穴の上にぶら下がっていました。下田先生はポケットから懐中電灯を二つ取り出し、一つを正子に渡し、ハシゴをつかんでもう穴の中へと降りてゆこうとしています。

「下田先生、どこへ行くの？」

足を滑らせないようにしっかりと踏みしめて下田先生はハシゴを降り続け、とうとう穴の底に達しました。頭の上にのしかかる戦闘機を不安そうに一瞬見上げましたが、次に懐中電灯をかざして、洞窟の奥を照らし始めました。「正子ちゃん、地底アユのいる湖はこの方向にあるのだね？」

「そうよ」

「距離はどのくらいだったかな？　そう遠くはないと思ったが」

「道案内してあげるわ」

口を開き、下田先生は何か言いかけようとしたが、そのときにはもう正子はハシゴを半分以上降りてしまっていました。スニーカーをはいた足がトンと岩の上に降り立つ音を聞いて、反論する気もなくなつたようです。「じゃあ、頼もうかな」

こうやって二人の旅が始まったのでした。懐中電灯を使って、正子だけでも下田先生の足元を照らしてあげました。小柄ですが体は頑丈で、下田先生はふらつくことなく荷物を運ぶことができました。角をいくつかが曲がると、水の匂いが鼻に届くのを感じることができるようになります。だけど二人とも、すぐに水辺に立つたわけではありません。少し手前で立ち止まり、懐中電灯でよく調べて地底アユの姿がないことを確かめないではいられませんでした。

水に近寄って水中を照らすと、長さ2メートル程度の地底アユたちの姿はいくつか見ることができました。でも二人が警戒していたのは、もちろん先日地上で大事件を起こしたあのサイズの魚たちです。20匹すべてが死んだことはわかっていましたが、念のためした。

下田先生が荷物を降ろすのを正子は手伝ってあげました。「ふう」と息をつき、下田先生は背中を伸ばすことができました。正子は手で、そつと箱の表面に触れてみました。材質のことですが、この箱は台所の流し台と同じようなステンレス製だということに気がつきました。ということは、この箱は水に対してとても強いはずです。水につけられたら、表面のあちこちに開けられている穴を通して、水が自由に出入りすることでしょう。でも何のために？

「下田先生、これは何をするための箱なの？」

だけど下田先生はそれには答えずもつと水に近い場所に立ち、正子に向けて手招きを始めるではありませんか。懐中電灯を持ち、水中を照らしています。

「どうしたの？」

「あれをくらん」

下田先生が指さしてくれたものを見て、正子は思わず息をのむことになりました。水中の白い砂の上にある物体に気がついたのです。でも地底アユではありません。ボールのように丸い形をして、サイズはそれこそテニスボールぐらいです。色は透明で、表面の薄い膜の中にある中身も同じように透き通っていて、まるでゼリーでも見ている感じです。

「先生、あれは何なの？」

「あれは地底アユの卵さ。いくつあるか数えることができるかい？」

「そんなこと無理だわ。何千もあるに違いないもの」

まったくそのとおりでした。卵たちは、水底の一角をすべておおうてしまっただけなのです。

「よくごらん」下田先生がもう一度指さしました。「透明な膜の中に魚の赤ちゃんがいるのが見えるだろう？」

正子は目をこらし、あつと小さな声を上げることになりました。下田先生の言うとおりだったのです。大人の地底アユとはだいぶ形が違います。長さ数センチの透明なメダカのようなものが、一つ一つの卵の中にいることに気がついたのです。卵がかえるまであとどのくらいかかるのかはわかりませんが、目玉がぎよりと大きく、流線型の体やヒレはもう形ができています。体が透き通っているせいで、胸の内部で心臓がトクトクと動いているのまで見ることができました。

「この箱を水中へ沈めるのを手伝ってくれるかい？」荷物を振り返り、下田先生が口を開きました。正子は箱に手を伸ばしかけましたが、疑問が口について出るのを止めることはできませんでした。

「先生は、ここに卵が産み付けられていることを知っていたの？」

「そうさ」正子と力を合わせ、下田先生は箱を引きずり始めました。

「どうして？」

「このあいだ死体で見つかった20匹のことだけれど、死因がわか

らないとニュースで言っていただろう？　それでピンときた。あの20匹は、卵を産んで寿命が尽きたから自然に死んだのださ。病気や毒といった原因があつたわけじゃない」

「なぜ？」

「話に聞いたことはないかい？　サケのような魚は海で長く生活するが、卵を産む時期がやってくると川をさかのぼり、うんと上流まで行つて産卵をする。でも、それがすむと力尽きて死んでしまうんだ」

「卵からかえつた赤ちゃん魚たちはどうなるの？」

「赤ん坊たちは川を下り、海へ出て成長する。そして大人になつて卵を産む時期が来ると…」

「また同じように川をさかのぼるのね」

「そうさ。だがおもしろいのは、サケは自分が卵として産み落とされた川を覚えていて、大人になつてからもちゃんとその川をさかのぼってくるということなんだ。不思議なことだが、自分が生まれたふるさとへと帰つていこうとするのだよ」

「だから、地底アユも自分たちのふるさとへ帰つて産卵するに違いないと思つたの？　でも変だね。地底アユはサケじゃないもの」

下田先生はにっこりと笑いました。「サケと同じように、アユも川に卵を産み、かえつた子アユは海に出て成長し、また生まれた川へと戻ってくるのだよ。サケとよく似た性質を持っているのさ。地底アユは、正体不明の地底魚とアユとが交雑したハーフの魚だ。ア



「この性質が残っていても、ちっとも不思議じゃないさ」

水のすぐそばまでやってくることができたので、二人は箱を水中へと降ろし始めました。正子が思っていたとおり、表面に開けられたいくつもの穴を通して、水が箱の内部を満たしてゆきます。

「ではこの箱は一体何なの？」

「エストロゲンという名前を聞いたことはないかい？」

「エストロゲン？」

「中学の理科ではまだ教えないかもしれないが、化学物質のひとつでね」

「薬のようなものなの？」

「まあそうだが、面白いことに、かなり薄い濃度であつても水に混ぜれば、エストロゲンは魚に影響を与えることができるんだ」

「どんな影響なの？ 死んじゃうの？」

「死にはしないさ」下田先生は首を横に振りました。「魚がまだ子供の時代にこの物質に接触すると、オスになるはずのものもみなメスに成長してしまうんだ」

「どうして？」正子が目を思いつきり丸くしている様子を想像するのは、そう難しいことではないと思います。

「詳しいメカニズムの説明ははぶくが、そういうもののなさ。する

と魚たちの群れはどうなると思う？」

正子は少しのあいだ首をかしげていました。「女の子ばかりの学校のようになっちゃうの？」

そのたとえの奇妙さに、下田先生はくすりと笑いました。「もちろんそうだが、重要なのは、メスばかりだともう子供を作ることができなくなるということさ。メスが卵を産んでも、精子をかけるオスがいないのだからね。卵はかえらない」

「だから？」

「今すぐというわけではないが、いずれ地底アユたちはゆっくり全滅してゆくということさ」

「でもそのエスなんとかって薬は、そんなに長く効果が続くものなの？ 何年もかかるのでしょうか？」

「さっき沈めたあの箱の中にエストロゲンが入っていたわけだが、箱には少し仕掛けがしてあってね。時間をかけてごくゆっくり、計算どおりなら10年以上かけてエストロゲンを放出し続けるように作っている。本当に少しずつだから、地上の生物に影響を与えるレベルではない。だが産卵場所であるこの地底湖には、十分な濃度を供給することができる。そのあたりの計算に手間取ったから、地底アユの対策にこれだけ時間がかかってしまったのだよ」

正子はもう一度水の中をのぞき込みました。「あの卵たちはみな死んでしまうの?」

「死にはしないさ。ただ生まれてくるのはすべてメスばかりということさ。10年以内には、地底アユにはもうオスは一匹もいなくなっていることだろうね」

「その後、何年もかけてゆっくり絶滅するのね」

「絶滅は仕方のないことさ。こんなに危険な魚だからね」

二人にはもうすることはありませんでした。地底湖に背中を向け、歩き始めたのです。下田先生が口を開きました。「正子ちゃんを見ていると、私の娘を思い出すよ」

「お嬢さんがいるんですか?」

「舞子といってね、血はつながっていないが、ひよんなことから引き取った。小学生だがおてんばでね。先日は学校で男の子とけんかして、髪の毛を引っ張ってとうとう泣かせてしまった。仲の良い同級生に洋一君というのがいて、この子がとめてくれたからよかったが、そうでなければどうなっていたか」

「そうなんですか」

「まったく女の子とい……」でも下田先生の言葉は途中で止まってしまいました。背後から大きな水音が突然聞こえてきたからです。だ

けど川の流れや、岩にぶつかる海の波のような音ではありません。二人とも聞いたことなどなかったでしょうが、浮上する潜水艦が水面を切り裂き、かき分けるときの音というのが一番近いかもしれません。

立ち止まり、二人はおそろおそろ振り返りました。

魚の種類にもよるのですが、卵を産んだ後、たいがいの魚の親たちはそのままどこかへ行ってしまう。卵はほっておかれ、誰にも世話をしてもらえないわけです。だけど、中にはそうしない魚もいます。そういう魚は大人が一匹、そばにつきつきで見張りをし、卵を食べようとやってくる敵を追い払ったり、ヒレを動かして新鮮な水を卵にあててやつたりするのです。

誰も知らなかったことですが、地底アユにもそういう性質があったようです。普通のアユにはない性質なので、正体不明の地底魚が持っていたものかもしれません。正子と下田先生がやってきたときには、たまたま食事のためか何かで見張り役が席を外していただけかもしれません。それが戻ってきたのだと考えるのが自然でしょう。

その姿を見て、二人は凍り付いてしまいました。体の前半分をすでに水から出し、岸の岩の上に乗せているのです。とがった頭部は、バスの車体に負けないほどのサイズがあるではありませんか。鼻の穴を大きく開き、匂いを確かめようとしているのかもしれません。ときどき頭を左右に動かしています。

「先生、あれ……」正子は小さな声でささやくことしかできませんでした。地底アユから二人までの距離はたった15メートルほどしかないのです。それにしてもなんとという大きさでしょう。現物にこれほどまで近寄ったことは二人とも一度もなかったのです。

「くそつ、卵には見張り役がいたんだ」下田先生がささやき返しました。

「でもあのサイズの魚は20匹しかいなかったのでしょう？ みんな死んでしまったはずだわ」

「実は21匹いたのだが、誰も知らなかったということさ。ゴタゴタ言ってもはじまらないよ」

「先生、1、2の3で走るわよ」

「だめだ。魚はとても耳がいい。足音を立てたら、すぐに飛びかかってくるよ」

「あいつは匂いをかいでいるんだわ」

「花火大会の夜の経験から、人間の血の匂いをよく知っているのだろう。だがケガでもして出血していない限り、君も私がかぎつけられる心配はないさ」

「そんなことを言っても、ここにずっと立つてはいられないわ。あいつが前進してきたら、どうするの？」

「いいかい正子ちゃん、あいつには目がない。だから……」でも下田先生は説明を続けることができませんでした。何がそうさせたのか、ささやき声が耳に届いたのか、地底アユが突然前へと身を進ませ始めたのです。もう我慢も何もできません。悲鳴を上げて正子は駆け出してしまいました。それが地底アユをさらに興奮させ、下田先生もドタドタと正子のあとを追っていったのはいうまでもありません。

途中でつまずいて下田先生が懐中電灯を落としてしまったので、今は残った一つを正子の手の中に握っているだけです。力いっぱい走るので、懐中電灯から出る光は、弾むボールのように洞窟の内部をはね回っています。正子はすばしっこいのでそんなことはありませんでしたが、地面から突き出している岩につま先をぶつけるときに上げる下田先生の悪態が、まわりに響きます。でももちろん、地底アユが立てる音はそれをかき消してしまうほどでした。

よく見ると地底アユの胸ビレと腹ビレは根元が太く頑丈に発達していて、足の代用品として十分に使うことができる形になっているのです。もしかしたら、魚類から両生類へと進化してゆく途中なのかもしれません。カブトのようにとがった頭をし、全体がウロコにおおわれ、ぬれてテカテカとひかり、しかもバスほどのサイズがある生物が後ろから追いかけてくる場面を想像してください。おまけに狭くて暗い洞窟の中なのです。このときの正子と下田先生の気持ちがよく理解できるだろうと思います。

本当の話、「これは夢でありますように」と正子は何回祈ったとか。一瞬後には目を覚まし、自分の部屋のフトンの中にいるのであればいいと何度願ったとか。でも願いはきき届けられませんでした。下田先生と一緒に走り続けるしかなかったのです。あまりにも恐ろしく、振り返って地底アユまでの距離を確かめる勇氣はどうしても出ませんでした。

やがて二人は、天井からの光で洞窟の内部が薄明るく照らされている場所までやってくることができました。いうまでもなく氷室があつて、あの戦闘機が屋根と床に大穴を開けているところです。今

は夏休みの最中だということを、正子は恨めしく思い出さないでは  
いられませんでした。この洞窟を一步出れば、外には平和で明るい  
夏の日が広がっているのに違いありません。地面の上と下だとい  
うだけで、なんという違いでしょう。走り続けているせいでいささ  
かあえぎながら、下田先生が声を出したのはこのときのことでした。

「正子ちゃん、その懐中電灯を私にかすんだ」

「どうして？」けどそういいながら、正子はいわれた通りにした  
のです。下田先生がさらに口を開きます。ヒゲだらけの口から見え  
ている舌は赤く、必死な顔つきもあって、まるで鬼のような眺め  
です。

「私は地底アユを洞窟のもつと先まで誘い出すから、そのすきに君  
は戦闘機の隣のハシゴをあがって地上へ逃げるんだ」

「先生はどうするの？」

「考えがあるんだ。この洞窟は君の家のカラ井戸の底につながっ  
ている」

「でもあそこは鍵がかけてあって、地上へ出ることはできないわ」

「わかってる。だがカラ井戸の底は少し広くなっていた。なんと  
か地底アユを出し抜いて、私はあそこでUターンをして戻ってくる。  
地底アユを後ろに引き連れてだ。わかるね？」

「ええ」

その後も早口で少し相談をし、二人は別れました。もうあの大穴

のところまで来ていたのです。地底アユの注意を引くため、なんと下田先生は突然大きな声で歌を歌い始めたではありませんか。男らしい太い声なのですが、いささか下手で音程が外れていることには気がつかないふりをすることにしましょう。また、歌い始めたのが第二次世界大戦の軍歌だったというのも、年齢を考えれば不自然なことではないかもしれません。

その間に正子はさつと進路を変えてわきへそれ、地底アユの鼻先をかすめるようにしてハシゴへと飛びついていました。氷室の床から洞窟の中へと降りてきているものです。この日は自転車に乗るためにスニーカーをはき、活動的な服装をしていたので、トントンとすばやく登ってゆくことができました。その彼女のすぐ下、つま先に軽く触れるようにして、地底アユの背びれが通り抜けていったのです。

いかにも魚くさい匂いが鼻に届いたのですが、その中にアユ独特のかぐわしい香りが混じっていることに正子も気がつかないではいられませんでした。やはりこれは元はアユだった魚なのです。そのことがいまさらのように強く感じられ、正子はなんだか泣きたいような気持ちになってしまいました。もし彼女自身が光のない地の底に閉じ込められ、正体のわからない他の生物と交雑して、姿を変えていかなくてもはならなかったとしたら、どんな思いがすることだろうと感じてしまったのです。

けど今は、そんなことを考えている余裕はもちろんありませんでした。下田先生の歌声は遠ざかっていきつつあります。正子も急がなくてはなりません。一度氷室の床の上に立ち、見回しました。その結果わかったのは、戦闘機は尾翼の先端の一ヶ所で本当に危なっかしくぶら下がっているだけだということでした。まるで片方のつま先だけでロープからさかさまにぶら下がっている軽業師のよう



な感じでした。戦闘機を下へと落下させるには、ただあの一ヶ所の引  
っ掛かりを外してしまえばいいのです。

心を決め、正子は戦闘機へと乗り移りました。足を滑らせないよう注意して、パイプのように丸い胴体の上に立ったのです。垂直ではないけれど機体は縦に立っているので、ひどく不安定な姿勢でした。金属板が薄いせいで、体重を乗せると足の裏でベコベコとへこみ、そのたびに心臓が止まってしまいそうなほどハラハラしないではられませんでした。

それでも両手と両足を使い、そろりそろりと登っていったのです。とうとう尾翼へとやってくることができました。飛行機のおしりのところに垂直に立っているシャモジのような形の板です。だけど正子はあせりを感じはじめました。尾翼は思っていたよりもしっかりと床材の間にはさまり、まるで万力のようにがっしりと固定されていて、彼女の力ではちよつとやそつとのことでは外れそうもなかったのです。そして、しばらくの間はすっかり聞こえなくなっていた下田先生の調子っぱずれな歌声が再び耳に届き始めたことに気がついたのは、このときのことでした。

体が熱くなり、自分の顔がさつと赤くなったに違いないと正子は感じることができました。最初は小さかったのですが、下田先生の声はどんどん大きくなってくるような気がします。とうとう正子は戦闘機の胴体の上に乗ったまま、体を上下に揺らし始めました。金属同士がぶつかり、ガンガンと大きな音がします。

でも何も起きないのです。床材は相変わらずびくともせず、尾翼の先端を放してはくれません。

「伯父さん、お願いだから落ちて」

ついに正子は、胴体の上でどんどんとジャンプをはじめたではありませんか。もうかなりやけくそになっています。下田先生の歌声は、今ではほとんど真下から聞こえてくるような気がします。

戦闘機がズルリと落下を始めたのは、突然のことでした。正子が何度目かのジャンプをした瞬間でしたが、飛び上がって落ちてきてあつと気がつくと足の下に戦闘機がなかったのです。バランスを崩してしりもちをつきそうになりましたが、体を支えるどころか、やっと捕まえることができた胴体に両手でしがみつくのが精一杯でした。でもおかげで、とんでもない勢いで迫ってくる尾翼に頭をぶつけるのは避けることができました。悲鳴を上げ、戦闘機と一緒に正子は落ちていったのです。

いいタイミングで、下田先生はその真下に差しかかったところでした。口を大きく開いて歌い続けながら、ちらちらと上を見ていたのです。どうやったのだろうと不思議に思えるほど上手に、正子は戦闘機を落下させてくれたわけでした。ただ下田先生が驚いたのは、正子までが一緒に落ちてきたことでした。

正子に乗せたまま、戦闘機は地底アユの背中に命中したのです。イモムシのように体をねじり、地底アユは悲鳴を上げました。大きな声なのですが、体のサイズの割にはかわいらしいキーキーとネズミに似た鳴き声でした。

「正子ちゃん、大丈夫か？」

戦闘機は地底アユにかなりの衝撃を与えたに違いありません。背ビレが裂け、血が流れ、うろこが何枚もはがれるのが見えました。戦闘機はすぐに転げ落ち、洞窟の床にたたきつけられる形になりま

した。正子が万一、機体や地底アユの下敷きになったりすれば、大変なことになります。けどどういう幸運なのか、正子の体が丸くなり、戦闘機の操縦席の中へころころと転げ落ちるのが下田先生の目に入ったのです。操縦席は金属板で囲まれて小部屋のようになっていますから、踏みつぶされてしまうことはないでしょう。下田先生はほっと息をつくことができました。

でも装甲車のような見かけはダテではないということなのか、地底アユは信じられないほど頑丈な生物でした。あれほどの重量と衝撃を受けたのに、死んでしまうどころか、失神する気配すらないのです。顔を上げ、体をさらに激しく動かし始めたではありませんか。正子のが心配でしたが、下田先生は再び走りはじめなくてはならなかったのです。

操縦席の中でどこかに頭をぶつけてしまったのか、何秒間か正子は何もわからなくなり、ぼんやりとしてしまいました。ただここですべて時間を無駄にしているわけにはいかないことはよくわかっていました。頭を振り、少しでもはつきりさせようとしたのです。何か小さなものが自分の手に触れたことに気がついたのは、このときのことでした。

最初は、なぜこんなところに口紅があるのだろうと不思議な気持ちになりました。ひんやりとした金属でできていて、円筒形をして、サイズといい大きさといい、本当に口紅とそっくりだったのです。指でつかみ、まばたきをし、正子は顔の前へと持ってきました。そして正体に気がついたのです。

弾丸でした。銃やピストルに入れて使うものであり、口紅とそっくりに思えたのは、その薬きょうの部分だったのです。口紅なら赤い紅があるはずのところには、鉛色をした弾頭があります。でも正子が発見したのは、この弾丸だけではありませんでした。もっと大きく、角ばった形をしたものがひざに触れていることに気がついたのです。もちろんそれも拾い上げました。弾丸とは違ってずっしりと重いものだったのですが、なんと本物のピストルだったのです。

その二つを手にして、正子は目を丸くすることになりました。戦闘機の操縦席で見つけても別におかしくはない物たちですが、彼女にとっては始めて現物を目にするものだったからです。そしてその後、少し奇妙なことが起こったのです。

そういえばこの間、下田先生はどうしていたのでしょうか。

下田先生はまだ地底アユの前を走り続けていました。傷を受けて地底アユのスピードが落ちていたので、さっきまでほどは息を切らしていません。正子にかかわるこの後の奇妙な出来事を、下田先生はすべて目撃することになりました。地面をはう地底アユの立てる音をかき分けるようにして、ザッザッと近づいてくる足音にまず気がつきました。

振り返り、でも歩みを止めることはせず、下田先生は懐中電灯を向けようと思いました。そこはたまたま洞窟が少し広くなっている場所だったので、ヒレやしっぽの動きをうまくよけながら、わきをすり抜けて地底アユを追い越し、自分のそばへ駆けてくる人影に気がついたのです。小柄な人物で、背もあまり高くはなく、体つきはきやしゃといってもよいでしょう。思わず下田先生は懐中電灯で照らそうとしましたが、声が聞こえてきたのはそのときのことでした。

「そうじゃない。オレじゃなくて魚を照らすんだ」

その声にはどこかなつかしく、心を揺さぶる響きがあることに下田先生は当惑を感じないではいられませんでしたが、とにかく相手の言う通りにしたのです。懐中電灯の明るい光の輪が、迫ってくる地底アユのとがった頭を照らしました。いつの間にか下田先生は立ち止まってしまっていました。暗くて見ることはできませんでしたが、その人物も走るのをやめ、下田先生の隣に立ったようです。

カチリという金属音が突然聞こえ、下田先生を少し驚かせました。もう何年も聞いていない音だったからです。でも何の音なのかは一瞬で思い出すことができました。スライドさせて遊底を開くときの音に違いありません。軍隊にいたころ、上官から命じられて、下田先生自身も何百回も練習させられたものでした。何も見えない本当

に真っ暗な中でも扱うことができるようになるまで、厳しく訓練されたものです。

「弾丸は一発しかないから、外すわけにはいかない」その人物が言うのが下田先生の耳に届きました。

「何だつて？」

だけど返事はありません。石の上で靴を動かす音が聞こえ、その人物がある姿勢をとったことが感じられただけでした。足を大きく広げて体を安定させて立ち、ひじと腕を伸ばして前方へ向けて構えたのです。もちろんピストルをです。

息を止め、ねらいを定めるのが感じられました。そしてその人物は、引き金にかけた指をゆっくりと引いたのです。

数十年の月日がたつていても、火薬は湿っていなかったようです。銃声は洞窟の中に大きく響きました。あまりの大きさに、下田先生はもう少して懐中電灯を落としてしまふところだったほどです。

気がつくと、弾丸は地底アユの額の中央に命中していました。体の大きさに比べると針の穴のように小さなものでしかありませんが、効果は絶大でした。声を上げることも体を震わせることもほとんどなく、地底アユは一瞬で死んでしまったのです。子供のころ、川でつりあげたばかりの魚の額の中央を釘の先で刺してすぐさま殺し、新鮮なままで家まで持ち帰るのが上手だった男の子がいたことを、下田先生は思い出さないではいられませんでした。この子と下田先生はその後も親友で、戦争が始まると同じ部隊にそろって入隊したものでした。でもその戦争で、彼は戦死してしまうのです。

懐中電灯を手にしたまま、下田先生はゆっくりと地底アユに近寄りました。けどもちろん、地底アユはもう体をピクリとさせることさえありません。額に開いた穴から、血がゆっくりと流れ出ています。下田先生は振り返ろうとしましたが、声が聞こえませんでした。

「下田、懐中電灯でオレを照らすのはやめてくれ。長い間真っ暗な中にいて、たったいま出てきたばかりなんだ。まぶしくてかなわんよ」

「なぜオレの名を知っている？ おまえは誰だ？」

「おいおい、戦友の名を忘れないでくれよ……」

このとき下田先生は大きな間違いを犯してしまいました。誰でもやってしまいそうなことです。懐中電灯をあげて相手の顔を照らすとしたのです。けど何も見ることはできませんでした。相手がいたはずのあたりには何もなく、懐中電灯の光はただその背後の岩壁を照らしているだけでした。下田先生は懐中電灯を下へと向けました。そしてそこに、気を失って倒れている正子の姿を見つけたのです。



地底アユの一件は、これで落着いたようでした。でもなぜか下田先生は口が重く、洞窟の中で起こったことをきちんと話してくれないことが正子は不満でした。正子自身は、弾丸とピストルを見つけた後のことはまるでカスミがかかったようにぼんやりとし、なぜかほとんど思い出すことができなかったのです。

正子も、努力して思い出そうとはしたのです。でもだめでした。そのことでいささかすねた気持ちになり、口をとがらせたりもしたのですが、この件については自分よりも下田先生のほうがもっと頭を悩ませ、納得できないでいるに違いないということには彼女も思い至らなかつたようです。その後も下田先生は考え続けました。あのとき自分の隣にいてピストルを使い、地底アユを一撃で倒してしまったのは一体誰だったのでしょうか。

下へ向けた懐中電灯の光の中に浮かび上がったのは、氣を失っていたとはいえ確かに正子でした。では正子がピストルを使ったのでしょうか。しかしそれはありそうもないことです。ただの中学生にすぎない女の子が知っているはずのないことばかりだからです。弾そうを引き抜いて弾丸を込め、遊底を動かして弾丸を薬室へと移動させるのです。それだけでなく、正しく狙いをつけて引き金を引かなくてはなりません。一見簡単そうに見えますが、訓練を受けた身でないとは実際には不可能なことでしょう。しかも普通の場合ではなく、あのように緊迫した状況だったのです。

地底アユの死を見届け、軽く頬をたたいて正子の目を覚まさせ、下田先生はハシゴを昇って地上へと出ることができました。正子も元気でした。日が暮れる前には家へと送り届けることができたので

す。その日、下田先生は正子の家に宿泊し、夜遅くまでお父さんと話し込んでいました。でももう困難は過去のものとなったのです。お父さんの表情に浮かぶ安堵の色を見て、正子もほっとし、下田先生とともに地下でおこなったことを少しばかり誇らしくさえ感じられるようになりました。

もう翌日には正子が住む町を離れ、下田先生は東京へと帰っていったのですが、町を出る直前、羽田家の墓所をこっそりと訪れたことを下田先生は誰にも話ませんでした。墓石に名など刻まれてはいませんが、幼なじみである戦友がここに葬られていることをすでに聞かされていたからです。

8月の終わりですがまだ暑く、丘の上にある墓所には太陽の光が強く降りそそいでいます。木々にはセミたちがとまり、遠慮なく鳴き声を上げています。気候の暖かいこのあたりでは、もちろん東京とはセミの種類が異なっているということに下田先生は気がついていました。下田先生もふるさとはこの町であり、ここで生まれて育ったのです。戦後、成人してからは東京へと出ていったのですが。

羽田和夫が葬られている墓石に下田先生は軽く手をつき、もたれかかりました。このあたりも子供時代の遊び場であり、よく二人でセミやカブトムシを捕まえたものでした。

何分間かじつと体を動かすことさえしませんでした。額の汗をふいて墓石に背中を向け、下田先生は歩き始めることができました。彼の心は穏やかで、もう悩みも当惑も感じられませんでした。もちろん下田先生は自分を科学者であると考えていたし、実際もう何年間も地質学者として働いてきたのです。でも今回の出来事を眺め、思いをめぐらせることに不安を感じることはありませんでした。科学者としてももちろん幽霊など信じてはいないし、これからも信じる

ことはないでしょう。だけど、あの洞窟の中で自分は古い友人に出会ったのだと、この瞬間の下田先生は納得できていたのです。

（終）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7433h/>

---

暗黒魚類

2011年7月8日12時35分発行